



TITLE:

若年者にみられた原発性膀胱腺癌 の1例

AUTHOR(S):

斉藤, 清; 高橋, 俊博

CITATION:

斉藤, 清 ...[et al]. 若年者にみられた原発性膀胱腺癌の1例. 泌尿器科紀要
1988, 34(6): 1035-1038

ISSUE DATE:

1988-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119602>

RIGHT:

若年者にみられた原発性膀胱腺癌の1例

秦野赤十字病院泌尿器科 (部長: 斉藤 清)

斉藤 清, 高橋 俊博

PRIMARY BLADDER ADENOCARCINOMA IN A YOUNG GIRL

Kiyoshi SAITO and Toshihiro TAKAHASHI

From the Department of Urology, Hatano Red Cross Hospital

(Chief: Dr. K. Saito)

We describe a case of primary adenocarcinoma of the bladder in an 18-year-old girl. She had no recurrence five years after operation. A young case is very rare because primary bladder adenocarcinoma are found mostly in old patients. We collected 86 cases of primary bladder adenocarcinoma in the Japanese literature, but found no case of a young patient in them.

In the literature, epithelial bladder tumors in children have been reported to show good prognosis compared with adults.

(Acta Urol. Jpn. 34: 1035~1038, 1988)

Key words: Bladder, Primary adenocarcinoma, Young case

緒 言

膀胱腫瘍は尿路腫瘍の中では、比較的に頻度の高いものであるが、その内で腺癌の占める割合は0.8~3%と少ない。膀胱腺癌は、膀胱上皮から発生する原発性腺癌と、尿管の遺残物から発生する尿管癌に分けられるが、前者の好発年齢は比較的に高く、若年者の発生は稀である。

今回、18歳の女子にみられた原発性膀胱腺癌の1例を経験したので症例を報告すると共に、市川¹⁾(1958)の報告以後の原発性膀胱腺癌の本邦報告例の46例の集計と、若年者発生の膀胱腺癌の特徴について考察を加えた。

症 例

患者: 18歳, 事務員

主訴: 蛋白尿

既往歴: 8歳時に両側逆流尿管のため尿管新吻合術を受けた。

家族歴: 特記事項なし

現病歴: 検診時に蛋白尿を指摘されて受診した。

現症: 体格中等、頸部および胸部に異常なし。下腹部に手術痕があるが、触診所見に異常なし。

検査成績: 血液像と生化学検査に異常なし。尿検査: 蛋白(卅), RBC(-), WBC(-), 尿細胞診

class I.

レ線検査成績: 胸部写真は正常, IVP で右腎は正常であるが、左腎は水腎・尿管を示し、尿管下端に狭窄がみられた (Fig. 1)。膀胱造影は逆流尿管や陰影欠損を認めない。

膀胱鏡所見: 左尿管口の上方に大豆大で乳頭状の広基性腫瘍と、膀胱頸部の11時の位置に小豆大で乳頭状の広基性腫瘍を検出した。Fig. 2 は左尿管口の上方の、Fig. 3 は頸部の腫瘍を示す。

入院後の経過: 内視鏡所見より膀胱腫瘍と診断し、経尿道的腫瘍切除術を実施した。病理診断は stage A で low grade の non-urachal adenocarcinoma と判明した。術後、5FU 4,000 mg と線維素溶解酵素 エレース 1 V を使った、膀胱内注入療法を5日間行った。術後2週目に、左尿管下端狭窄に対して尿管新吻合術を実施した。尿管下端の病理検査では腫瘍組織の残存はなく癒着組織を認めた。術後4週間で退院した。その後、5FU 2,000 mg とエレース 1 V の膀胱内注入療法を2週~1カ月に1回で実施した。現在、術後5年になるが再発はない。

病理組織所見: 粘膜上皮は乳頭状を示し、粘膜下層に円形細胞の浸潤を伴う。腫瘍細胞は粘液産生を示す高分化型で、腺管を形成し、非浸潤性に発育を示した (Fig. 4, 5)。



Fig. 1. IVP shows right normal pyelogram and left dilated upper urinary tract on ten years after bilateral anti-reflux operation.

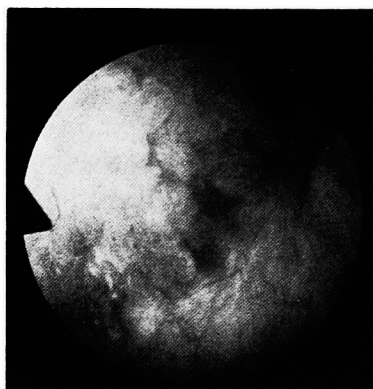


Fig. 2. Cystoscopic photograph shows papillary and sessile tumor near the neoureteral orifice of the left side.

考 察

原発性膀胱腺癌は、膀胱腫瘍の組織型の内では比較的に稀なものである。その発生頻度は、本邦例では市川¹⁾ (1955) が1,018例の原発性膀胱腫瘍の中で40例 (3.9%) にみられたと報告している。一方、欧米では Mostofi²⁾ (1955) が、膀胱腫瘍の全体の1~2%に発生したと述べているが、Thomas ら³⁾ (1971) は上皮性膀胱腫瘍の5,300例中25例 (0.75%) に、O'Dea⁵⁾ (1983) は15年間の4,500例の膀胱腫瘍の中で25例 (0.55%) とかなり少ない発生率を報告している。

本邦の報告例は市川が40例を報告した1955年以後

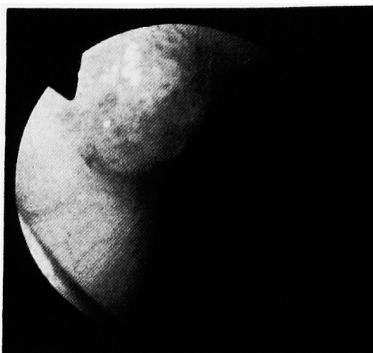


Fig. 3. Cystoscopic photograph shows papillary and broad-based tumor at 11 o'clock of the bladder neck.

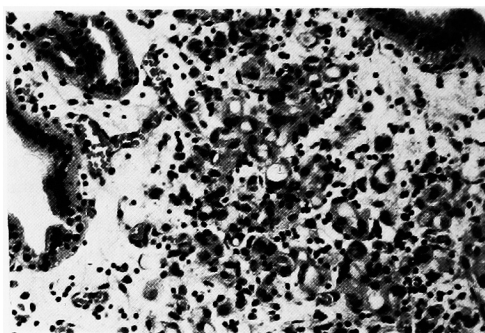


Fig. 4. Low-power view reveals differentiated adenocarcinoma with inflammatory cell infiltration. H.E. ×200.

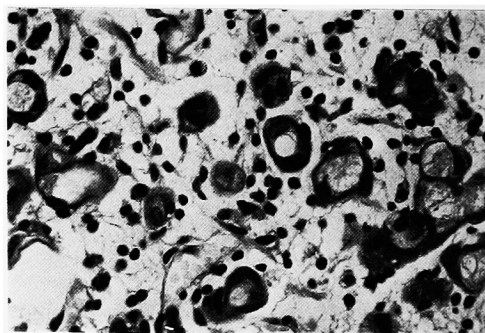


Fig. 5. High power view reveals signet-ring cells. H.E. ×400.

は、青柳⁹⁾ (1979) が33例を集計したが、その中で10例が頂部に発生していたために尿膜管起源かどうか不明であると述べている。その後、1985年に岩井ら²⁰⁾ が、市川以後に報告された30例を、また、1985年には高士ら¹⁷⁾ が、同様に28例を集計している。われわれが調べた範囲では、岩井らと高士らが報告した中に含まれていないか、あるいはその後報告された症例として16例が集められた^{8, 11-16, 18, 19, 21, 22)}。その結果、市川以後

の報告例は46例を数える。

われわれが集計した46例の原発性膀胱腺癌について, 年齢分布は自験例を除くと38歳から89歳に及び, 平均年齢は56歳と高齢者に好発している。20歳以下の原発性膀胱腺癌の報告例は, われわれが調べた限りでは, 欧米においては Mostofi ら³⁾ (1955), Javadpour and Mostofi²⁾ (1969) と Raghavaiah and Reddy⁶⁾ (1976) の3例がみられた。一方, 本邦においては自験例のみであった。性別では男女比が29:17 (1.7:1) と男性に多い。発生部位は, 後壁と側壁に発生することが多く, この両者で半数を占める。単発例が大多数であるが, 7例で2~4個の多発例がみられた。しかし, 頂部にみられるものは尿管管癌との鑑別が必要となる。

膀胱の腺癌は, 膀胱上皮から発生する原発性腺癌と尿管管の遺残物から発生する尿管管癌に分けられる。尿管管に由来する腺癌の鑑別は次の3つの条件によって行われる。1) 腫瘍が頂部または前壁にある。2) 腫瘍は粘膜下より筋層内にあり, 表面が正常な, または潰瘍化した上皮で覆われている。3) 腫瘍に隣接して尿管管の遺残物がみられたり, 恥骨上への腫瘍の拡がりが見られる。自験例はこれらの条件のいずれにも当てはまらず, 原発性腺癌と判断した。

若年者の上皮性膀胱腫瘍の特徴として, 成人のものと比べて, 膀胱腫瘍の全体の中に占める割合は非常に少ない。市川 (1955) の報告した1,018例の膀胱腫瘍の中で20歳以下のものは20例 (1.95%) にすぎない。このうち, 上皮性膀胱腫瘍は5例 (0.5%) である。Melicow²³⁾ (1974) は2,500例の膀胱腫瘍中に子供の上皮性膀胱腫瘍の1例 (0.04%) を認めた。Javadpour and Mostofi²⁾ (1969) は1,000例の上皮性膀胱腫瘍の中で20歳以下の症例は4例 (0.4%) であったと述べている。Shaw ら²⁴⁾ (1958) は20歳以下の40例の上皮性膀胱腫瘍を集計しているが, この内のほとんどのものが grade I~II の移行上皮癌で, 乳頭状・非浸潤性の発育様式を示していた。このように, 若年者の上皮性膀胱腫瘍は成人のものとははっきりと異なり, 単発性で乳頭状で, 悪性度の低いものが大多数を占めるため, 良好な臨床経過をとる。

膀胱腺癌は移行上皮癌と比べて局所での再発をおこし易く, 膀胱壁への進行性の浸潤傾向を持ち早期に遠隔転移を来し易いといわれている。われわれの集計した46例の原発性膀胱腺癌において, 6ヵ月以上の観察が行われた19例の術後の経過では6例 (31.6%) が再発ないし死亡し, 13例 (68.4%) で再発がない。しかし, 先の Javadpour and Mostofi²⁾ (1969) と

Raghavaiah and Reddy⁶⁾ (1976) の原発性膀胱腺癌症例は急速な再発・転移により死亡している。幸いに, 自験例は5FUと線維素溶解酵素の膀胱内予防注入を長期に実施していたが, 術後5年が経過したが再発を起こしていない。

結 語

1) 18歳の女子にみられた原発性膀胱腺癌の1例を報告した。

2) 若年者の原発性膀胱腺癌は稀で, 欧米で3例, 本邦では自験例のみであった。

文 献

- 1) 市川篤二・膀胱腫瘍の遠隔成績調査。日泌尿会誌 **49**: 602-610, 1958
- 2) Javadpour N and Mostofi FK: Primary epithelial tumor of the bladder in the first two decades of life. J Urol **101**: 706-710, 1969
- 3) Mostofi FK et al.: Mucous adenocarcinoma of the urinary bladder. Cancer **8**: 741-758, 1955
- 4) Thomas DG et al.: Study of 52 cases of adenocarcinoma of the bladder. Br J Urol **43**: 4-15, 1971
- 5) O'Dea MJ: Adenocarcinoma of bladder. Urology **21**: 357-359, 1983
- 6) Raghavaiah NV and Reddy CRR: Adenocarcinoma of the urinary bladder. J Urol **116**: 526-528, 1976
- 7) 平尾佳彦, ほか: 膀胱に原発したと思われる印環細胞癌の1例。日泌尿会誌 **64**: 983, 1973
- 8) 宮原 茂: 膀胱腺癌の1例。日泌尿会誌 **70**: 1237, 1979
- 9) 青柳直大, ほか: 膀胱腺癌の1例。日泌尿会誌 **70**: 1171, 1979
- 10) 秋鹿唯男: 原発性膀胱腺癌の1例。東京医大誌 **40**: 684, 1982
- 11) 鈴木 滋: 膀胱に原発した中腎腫型腺癌の1例。日泌尿会誌 **73**: 545, 1984
- 12) 松岡敏彦: 原発性膀胱腺癌の1例。日泌尿会誌 **74**: 462-463, 1983
- 13) 国芳雅広, ほか: 膀胱腺癌と胃癌を同時発生した1例。臨泌 **37**: 241-244, 1983
- 14) 進藤和彦, ほか: 原発性膀胱腺癌の5例。西日泌尿 **45**: 1109-1114, 1983
- 15) 渋谷宏彦, ほか: 印環細胞癌の1例。癌の臨床 **31**: 97-101, 1985
- 16) 下山 茂, ほか: 膀胱内に原発性腺癌と移行上皮癌を異所性に同時発生を認める1例。臨泌 **39**: 235-237, 1985
- 17) 高士宗久, ほか: 多発性内分泌腺腫症 (MEA) I 型に発生した原発性膀胱腺癌の1例。泌尿紀要 **31**: 499-506, 1985

- 18) 堂北 忍, ほか: 膀胱憩室腺癌の1例. 臨泌 **39**: 871-873, 1985
- 19) Kitamura H et al.: 膀胱原発の印環細胞癌. 2症例の組織学的検索. Acta Pathol Jpn **35**: 675-686, 1985
- 20) 岩井哲郎, ほか: 原発性膀胱腺癌の1例. 奈良医学誌 **36**: 580-584, 1985
- 21) 飯カ谷和彦, ほか: 移行上皮性上皮内癌が併存した原発性膀胱腺癌の1例. 臨泌 **40**: 329-331, 1986
- 22) 川添和久, ほか: 膀胱原発性の腸管型腺癌 (Paneth cell を及む) の1例. 日泌尿会誌 **77**: 822-826, 1986
- 23) Melicow MM: Tumors of the bladder: A multifaceted problem **112**: 467-478, 1974
- 24) Shaw JL et al.: Transition of cystitis glandularis to primary adenocarcinoma of the bladder. J Urol **76**: 815-822, 1968

(1987年4月30日受付)